神道フォーラム

ISSA : International Shinto Studies Association

Vol.60
神道国際学会会報
令和2年1月1日号

特定非営利活動法人 神道国際学会　〒154-0014 東京都世田谷区新町3-21-3 桜神宮 神習会館内　電話：080-7662-0640　http://www.shinto.org/

第6回フィールドワーク 大嘗宮跡を訪ねる

令和元年11月25日、大嘗宮跡見学を目的として第6回フィールドワークを開催した。参加者一行は、晩秋とは思えない汗ばむほどの好天の下、見学コースを散策し、三宅善信本会理事長の解説に耳を傾けた。

東京駅丸の内南口に集合したフィールドワーク参加者一行は、大嘗宮跡見学の唯一の入り口である皇居坂下門へ向かった。そこでは、警察官による手荷物検査とボディチェックという二重のセキュリティチェックを受け、ようやく皇居内へ足を踏み入れることができた。

皇居は、もともとは江戸城であり、その石垣の堅牢さや、敵襲を想定して容易には進めないよう工夫された通路の複雑さなどに、ここが武家の手による建築であることを感じながら歩を進めた。富士見櫓を過ぎて江戸城の本丸であった東御苑に入ると、やがて、遥か前方に、他とは違う真新しい建築物が見えてきた。本フィールドワークの一番の目的、大嘗宮跡である。

大嘗宮跡の前に着いた一行は、建築の美しさに目を見張り、その口々から「壊してしまうのはもったいない」というため息がもれた。新しい木材の良い香りが漂う中、三宅理事長が大嘗祭の様式、そして大嘗宮の構造や歴史について、わかりやすく解説を述べた。その解説は、目の前にそびえるクヌギの木で作られた鳥居や、竹製の壁や小柴垣いっぱいに挿された榊から、各建物の役割や供えられる庭積の机代物について、さらに儀式の時刻と星座の関連にまで、多岐にわたり、一行は興味深く聞き入っていた。

一行は南面する大嘗宮跡の正面から、順路に従って、西方、北方へとその4分の3を巡り、要所ごとに理事長の解説を聞いたり、参加者同士の対話を楽しんだりしながら、秋のひと時を過ごした。

大嘗宮跡で解説をする
三宅理事長

新年のご挨拶

マイケル・パイ
（神道国際学会 会長）

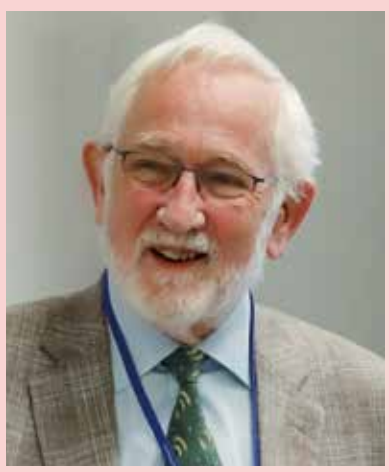
令和最初の新年にあたり、神道国際学会を支援してくださるすべての人に、私の最高の願いをお届けすることは、大きな喜びです。

本会は、この1年間、即位の礼と大嘗祭に関するセミナーを日本語と英語で開催するなど、さまざまな方法で着実に活動を続けてきました。また、若者の宗教的志向や願望、そして、漫画やアニメなどのポストモダン時代の文化的形態にも焦点を当ててきました。これらの活動の中で、私たちは注意深く研究し、情報と注目点を調和のとれた文脈で共有することが、どれほど価値あることなのかを発見しました。神道に対する国内的および国際的な見方はさまざまですが、神道についての理解を深めることは非常に重要です。神道は、やはり日本人の生活の主要な基準のひとつなのです。

私たちが新年を楽しみにするとき、私たちの心には多くのことが浮かんでいます。科学技術の発展はますます急速に進んでおり、多くの変化はプラスですが、破壊的な傾向も見られます。世界は、さまざまな紛争と気候変動のために大きな危険にさらされています。その中で、日本は平和であることに、私たちは感謝しています。地震と台風の脅威は心配ですが、それでも、より差し迫った問題を抱える世界の一部として、この国――神道とともにあるこの国――は、あらねばなりません。

神道の伝統は、世界の人々の調和を促進するのに、どのように役立つのでしょうか。神社が持つ雰囲気は、自然に対する感謝の気持ちを育むことに、どのように役立つのでしょうか。これらは、未来に反映していくべき質問です。

昨年、実働面で、財政面で、そしてあらゆる面で貢献してくださった全ての人に、この場を借りて私から個人的な感謝を申し上げます。私たちの活動が本年も創造的かつ効果的に継続できることを心から願っています。



神道国際学会第22回セミナー「現代の聖地：若者文化と神道」報告

椎名　潤（岐阜女子大学客員教授・神道国際学会監事）

神道国際学会（マイケル・パイ会長　マールブルク大学名誉教授）が主催する第22回国際神道セミナー「現代の聖地：若者文化と神道」が、令和元年10月29日、ＪＲ東京駅前の関西大学東京センター（東京都千代田区丸の内）で開催され、基調講演とパネルディスカッションを通じて、日本から発信されるアニメーション（以下＝アニメ）がなぜ世界の若者を魅了するのか、また聖地のあり様やその変遷などを論じた。

多くの聴講者が講師の話に熱心に耳を傾けた

はじめに、本会のマイケル・パイ会長（マールブルク大学名誉教授）が「若者文化のキーワードはアニメ。その想像力の世界に神はいるのか、非常に興味深い問いかけであり、そこから何を読み取り、どう分析するのかに期待している」と挨拶した。

基調講演は、レナト・リベラ・ルスカ氏（岡山県立大学特任講師）と本会理事長の三宅善信氏の2人が行なった。

「日本のアニメにおける普遍的アニミズム」と題して講演したルスカ氏は、アニメ研究家として、また若者代表として、現代日本の文脈の中で、アニメから連想される「聖地巡礼」をキーワードに、アニメに至る技術的なプロセスと方法論（メソドロジー）を展開した。

「アニミズムというのは、すべてのものにいのちがあるという考え方で、海外での神道研究授業の第一章に出てきそうなテーマ。ここからアニメいう言葉が発生するのですが、語源はラテン語の“animationem／animatio／animare”で、『いのちを与える』」という意味」。

「アニメの制作手法は、ストップモーションアニメ、CGアニメ、手描きアニメの三つのタイプがあり、日本では手描きアニメが一番普及している。それは自由自在に変形や強調をすることができ、アニメーター自身の表現を伝えることができるからです」。

ルスカ氏はまた、日本特有の「感情移入」の技法は「手塚治虫」からと主張。最低限の制作費で制作しなければならない制限のもと、「いざ動きを見せるという大事な瞬間には、多くのセル画を注ぎ込む」手法を取ったという。

例えば「鉄腕アトムが初めて起き上がるシーンでは、よろめきながらバンビのように――手塚治虫のディスニー映画の『バンビ』好きは有名――試行錯誤で一歩ずつ歩き始める」「キャラクターが歩き始めた瞬間、目の前で命が吹き込まれたという状況が展開された」「日本のアニメキャラクターは、見た目以上に深く描きこまれている」、「アトム、『アルプスの少女ハイジ』のハイジ、『母をたずねて三千里』のマルコは、それぞれに悩みや希望があるからこそ、視聴者は親しくなれる。そして自分の子供のように『頑張ってほしい、成功してほしい』と願う。それは、そのキャラクターが生きているから」と感情移入の技法を分析した。

開会の挨拶をするパイ会長

「日本のキャラクターはとてもシンプル。それは見る側がどういう思いかを反映できるようになっているからで、それを単なる絵ではなく、生き物として認識し、その時の自分の感情に合わせて親近感を抱く」と考察。

このような「キャラクターに対する感情移入は、文化を問わず、世界共通のもので、日本のアニメの人気には普遍性がある」、「日本アニメに普遍性があるのは、すべて実写の手法を取っているから。日本ではセットの中にカメラマンがいるというカメラワークで撮っている」、そして「キャラクターやストーリーの魅力だけではなく、日本のアニメには特有の魅力が潜んでいる」と分析した。

さらに「日本のアニメの親しみやすさは、キャラクターが置かれている状況が見る側にとって、『体験してみたい』と思わせるものだから。『アルプスの少女ハイジ』を見た人は、今でもスイスに行きたがる。これに応えて、スイスでは日本人観光客向けに、アニメのハイジやペーター、クララたちを看板にしたりしている」と明らかにした。

「成田空港には『アニメ・ツーリズム協会』という団体が、いろいろな作品の中から、『訪れてみたい日本のアニメ聖地』を88ヵ所選んで、海外からの観光客に『ここへ行ってみてはどう

レナト・リベラ・ルスカ講師

ですか』と提案している。このプロセスは大変、興味深く、自らがキャラクターになりきり、『生きている証し』を探しに出かけるという行動が起きている」として、「その現象の始まりとされるのが、10数年前の『らき☆すた』という作品で、その舞台となった久喜市・鷲宮神社に、大勢のファンが詰めかけた」と、若者の間でアニメの舞台を疑似体験する「聖地巡礼」という行為が流行っている実態を示した。

最後に、今後の展開として、数年前からV-Tuber（ヴィ・チューバー）という現象が起こり始めていることを紹介。それは、架空のアイドルやタレントになりきること、つまり、「命を共有するということ」で、「その傾向が益々、強まることが予想される」と結んだ。

続いて、三宅氏が「自己目的化される聖地」と題して講演した。

三宅氏は「聖地とは人々が神聖な場所と考える所。ある宗教にとっては『特別な意味を持つ』と感じられる所」として、メッカ、シナイ山、バチカン、ブッダガヤ、比叡山、伊勢神宮などを紹介。

また世俗的な聖地として、高校球児が目指す甲子園、音楽祭で知られるウッドストック、テニスの殿堂ウインブルドン、ゴルフ選手が憧れるセントアンドリュースなどを挙げ、宗教的、世俗的を問わず、世界中で「そこにしかないもの（唯一無二）」に触れるため、あるいは「その座標そのものに意味のある場所」を共有するため、私たちは「聖地」を訪れ、「聖なる時間」を追体験する「巡礼」が始まったと指摘した。

「現代の聖地」をテーマに多岐にわたる講演になった

三宅善信理事長

「巡礼」には、古くから「歩くこと自体を目的化」するエルサレム、メッカ、サンティアゴ・デ・コンポステラ、四国遍路、熊野詣、伊勢参り、富士登山などが知られているが、現代的な「巡礼」とは、異界への没入感、精神的な浄化、さらには「生かされている」という実感を得るためであり、特に「アニメファンにおいては、特定のバーチャル空間への自己の同期（シンクロ）が目的となった」、「現代においては、宗教の私事化が進み、信仰を好きなように解釈しても、それは個人に与えられた権利という考え（フランスの社会学者ダニエル・エルヴェ＝レジェ）から、『自分教』という概念が誕生。神話や伝説に基づく聖なる遺物を、そっくりそのまま信じるという行為は難しくなった」と、聖地の意義付けや巡礼の変遷を分かり易く解説した。

アニメキャラクターと神社について、『うる星やつら』『犬夜叉』『セーラームーン』『君の名は。』などでは、巫女キャラクターが公認化され、鷲宮神社、神田明神、下鴨神社など、多くの神社がアニメの舞台になっていることなどを明らかにした。

さらに、近年流行の「パワースポット」にも焦点を当て、各地の神社仏閣にある大木や巨石のみならず、「非宗教的なイメージの中に宗教的な意義付けをするようになった」と言

盛り上がりを見せるパネルディスカッション

閉会の挨拶を述べる奥野副会長

及。『あしたのジョー』の力石徹、『北斗の拳』のラオウ、『機動戦士ガンダム』のガルマ・ザビのように、実際のアニメキャラクターの「葬儀」が行われたことを紹介。

そして、猛威を振るう怨霊を鎮魂し、私たちを護ってくれる神へと祭り上げた菅原道真や平将門の例や、原爆犠牲者、日航ジャンボ機墜落事件による御巣鷹山での追悼式典にも触れて、日本人にとって、「鎮魂から供養へ」と昇華させるには「長い時間の経過が必要」と論じた。

パネルディスカッションでは、本会常任理事の塩谷崇之氏（秩父今宮神社・弁護士）をモデレーターに、基調講演者のルスカ、三宅の両氏、理事のファビオ・ランベッリ氏（カリフォルニア大学サンタバーバラ校教授）、常任理事の芳村正徳氏（神習教教主）が議論を進めた。

ランベッリ氏は「手法として擬人化するアニメ文化は、今や世界共通のものだが、宗教的アニミズム、つまり精霊信仰とはまったく違うもの」と述べ、さらに「日本の若者の神道理解は断片的。それは学校で宗教の時間がなく、神道というものが公の言説にはなっていないから。しかし、その方がいいのかも知れない。聖なるものに対して、創造的な考え方や態度が生まれる」、また芳村氏は「若者文化ということで、いろいろな場所が聖地化されていく現象を如何なものかと思っていたが、もはや、この流れをきちんと受け止め、私たちの教化に繋げていくことが重要」との見解を示した。

そして、本会副会長の奥野卓司氏（山階鳥類研究所所長）が閉会の挨拶を行い、「本会としては、神道とスポーツなど、まだまだたくさんの研究テーマがあるので、順次、提供していきたい」と締めくくった。

お知らせ：第23回国際神道セミナー開催について

神道国際学会では、令和2年3月13日（金）、第23回国際神道セミナー『神々とスポーツ』を開催します。常に、我が国の文化と神道について考察を続けてきた本会が、オリンピックイヤーにふさわしく、神々に捧げられる競技や、競技の中にある神の存在について、内外の専門家を招いて、広い視野から討議します。開催は東京駅隣接の関西大学東京センターにて、聴講無料・事前登録制を予定しております。詳細は決まり次第、ご案内しますので、ぜひ、お繰り合わせの上、ご参加ください。

連載 神道ＤＮＡ

『大嘗祭は国費で賄うべし』

金光教春日丘教会長／㈱レルネット代表　三宅善信

令和元年11月14日の宵の口から15日の未明にかけて、皇居東御苑に特設された大嘗宮において、今上陛下一世一代の大嘗祭が古式ゆかしく厳修された。平成から令和へと改元された５月１日当日の「剣璽等継承の儀」に始まり、世界各国からの祝賀使節を招いて内外に即位を宣明する10月22日の「即位礼正殿の儀」、さらには11月10日の「祝賀御列の儀」まで半年間にわたって実施された「皇位継承に伴う儀式（国事行為）」は終了したことになっている。

一方で、古代より連綿として継承されてきた大嘗祭は「神道色が強いので皇室の私的行事である」という解釈の下に、「宮廷費を充当するのは相応しくない」と、主張する向きが一部野党や反日マスコミを中心にあるが、彼らは日本国憲法の理念を正しく理解しているとは言い難い。

もし「（皇室の私的行事である）大嘗祭にかかる費用27億円を宮廷費（総額111億円）ではなく、内廷費（総額3.2億円）から負担しなければならない」というのであれば、大嘗宮の建設などはとうてい不可能になる。だからと言って、登極した新帝を霊的に天皇たらしめる大嘗祭を斎行しないわけにはいかない。すると、その代替案として、民間の誰かが呼びかけ人となって「大嘗祭奉賛会（仮称）」なるものを結成して、広く寄付を呼びかけるだろう。そして、あっという間に27億円以上の寄付金が集まってしまうことは明白である。

20年に一度の伊勢神宮の式年遷宮の際には「式年遷宮奉賛会」が結成され、550億円もの寄付金を集めているのだから、「天皇陛下一世一代の儀式のため」と銘打って寄付を募れば、数千億円集まるかもしれない。27億円程度の金なら、一人でポンと出す大金持ちや会社や教団があるかもしれない。もしそうなったら、当然のことながら、その人や会社や宗教団体の意を忖度した大嘗祭になってしまうに違いない。もっと拙いのが、日本に悪意を持つ外国政府が資金を拠出することであろう。後で、何を言われるか判ったものでない。そして、政府のコントロールが効かない「奉賛会」が集めた巨万の富に群がる人がゾロゾロと…。

そんなことにならないためにも、大嘗祭の費用は100%国費で賄い、内閣の助言と承認の下に行うのが日本国憲法の理念に叶っている。逆説的に聞こえるかもしれないが、神道的儀礼である大嘗祭を特定の個人や団体を介入させることなく100%国費で遂行することこそ、「政教分離の原則」を遵守するための最良の方法なのである。

「江戸時代の朝廷は貧乏であった」ことは一般的によく知られているが、実は、全国の諸藩が大嘗祭に関わる（献金する）ことを幕府は厳しく制限し、100%幕府からの献上金で大嘗祭が斎行されていたことを知る人は少ない。何故なら、もし朝廷が大嘗祭のための資金を広く自由に募集すれば、特定の大名が朝廷と接近し、めいめい勝手に官位を得、場合によっては倒幕の動きに繋がるかもしれないからである。現在だって、安倍政権に取って代わりたい勢力や良からぬことを企む団体や外国政府など、「天皇と近しい関係になるために数百億円払っても良い」と思っている個人や団体はいくらでもあるはずである。

古代から連綿と伝わる厳粛な神道儀礼と、そのことに全身全霊をもって奉仕される天皇陛下の尊いお姿を日本国民だけでなく、世界中の人々が驚きと尊敬の念を込めて見ることができた。大嘗祭が、この国の品格を高めることに大いに貢献したことは言うまでもない。

戦前と戦後をつなぐ艦内神社（前編）

久野　潤
（大阪観光大学国際交流学部 講師）

大日本帝国海軍を描いた映画には、かつて艦内神社が登場していた。『戦艦大和』（１９５３年）では沖縄特攻出撃前、『ハワイ・ミッドウェイ大海空戦 太平洋の嵐』（１９６０年）『大日本帝国』（１９８２年）では真珠湾攻撃で発艦前に艦内神社に参拝するシーンがある。現在の海上自衛隊を扱った映画でも、『亡国のイージス』（２００５年）での艦内格闘シーンで艦内神社が一瞬映っている。戦前も戦後も、海の防人たちの最後の心の拠り所が八百万の神々であるということに変わりはない。これは特定信仰というよりも、我が国古来の自然な習慣が現れたものである。

古代～中世に於ける〝艦内神社〟

初代神武天皇が出航したとされる現在の宮崎県日向市美々津に「日本海軍発祥之地」碑が建っていることから分かる通り、国家事業としての我が国海軍の運用は建国の神武東征に始まる。同じく『日本書紀』に見える三韓征伐や日本武尊東征においてもそうだが、航海と祭祀は一体のものである。何か必要がある際に祭祀を行うというよりも、祭祀あっての航海と言って差し支えなかろう。

神功皇后が三韓征伐の際に住吉大神の加護により新羅を平定できた（および現在の住吉大社を創祀した）という伝承から、のち遣隋使・遣唐使発遣に際して航海安全祈願が執り行われるのみならず、守護神として船内で奉斎されるようになる。請益僧として遣唐使船で派遣された円仁（７９４～８６４）の『入唐求法巡礼行記』においても、その様子が描かれている。このあたりが、史料に現れる艦内神社の初出かもしれない。

平安時代においては壇ノ浦の戦い（１１８５）の際、第81代安徳天皇の御座船に守護神として、安芸国一宮である厳島神社の分霊が祀られていたという。合戦後「御鏡太刀様」のものが磯辺に放棄されていたところ、神託を受けた里人が社殿を建立したのが現在山口県下関市上新地町に鎮座する厳島神社の創建とされている。

そして生田神社（神戸市中央区）境内で猿田彦命を祀る大海神社は、豊臣秀吉が文禄・慶長の役（いわゆる朝鮮出兵）の際に祈願し船内に祀ったと伝わる。このように、航海安全を願って船内に神を祀るのは昔から行われているが、船名――いわばその艦船のアイデンティティとの関係は往時は確認できない。

艦内神社前史としての艦内神像

明治期の帝国海軍の艦内神社については不明な点が多いが、艦名ゆかりの神像を奉戴した例もある。

日露戦争で活躍した装甲巡洋艦「八雲」（ドイツ製）「出雲」（イギリス製）艦内には、島根県有志から寄贈された稲田姫（ヤマタノオロチを退治したスサノオの妻となるクシナダヒメ）神像が置かれていた。１９０１年８月14日の蔚山沖海戦で、第二艦隊旗艦「出雲」は神像を安置する将官室に被弾。室内はメチャクチャに破壊されたが、神像はまったく無事で、山本英輔第二艦隊参謀（山本権兵衛の甥）は「出雲勝って 出雲も安かれ 出雲艦 出雲の神や 出雲守らん」と詠んだ。出雲の神であるクシナダヒメが無事であることで、装甲巡洋艦「出雲」を護り、そしてその「出雲」が戦闘に勝って出雲国（を含む日本）を守ることを願うという構図を端的に示していよう。

また、日本海海戦で鹵獲されたロシア海軍の最新鋭戦艦「アリヨール」が復旧工事ののち戦艦「石見」として帝国海軍に編入された際、艦内に可美真手命神像が置かれた。艦名の由来となった石見国の一宮として知られる物部神社の祭神可美真手命の神像を、地元有志が石見産の銅で制作し寄贈したものである。資料には「石見国ハ地山陰ニ僻在シ未タ曾テ甚タ世ニ著レス 然ルニ今ヤ此ノ如シ 是レ石見国人カ特ニ無上ノ栄誉トシテ歓喜慶賀措ク能ハサル所ナリ」と書かれているが、最新鋭戦艦の名前となって地元ゆかりの神像が艦内に祀られ人々も大喜びだというのである。

これは艦内神社として艦名ゆかりの地域の神社の祭神を分霊し、「海軍が地域（日本）をまもり、地域が神社をまもり、神社の神が海軍をまもる」という構図が定式化される以前の、地域と海軍の強い紐帯が形成されてゆく過程でもあった。

物部神社（島根県大田市）に現存する「石見」の可美真手命神像

「ユダヤ教と神道の出会い」に参加

9月25日、東京都港区の国際文化会館にて、イスラエル日本学術文化振興協会主催によるシンポジウム「ユダヤ教と神道の出会い：旅の記録」が開催され、本会から椎名潤監事（岐阜女子大学客員教授）および宇根希英事務局長の2名が参加した。

シンポジウムでは、イスラエルの国立大学であるエルサレム・ヘブライ大学やテル・アビブ大学の研究者らが来日し、日本国内からは石川県の国際高等専門学校の上田清史教授を招き、一神教であるユダヤ教と多神教である神道について講演・討論を行った。

シンポジウムは2部構成で、午前中は「神道とは何か」、「神道の特徴とは」、「神道をどのように理解すべきなのか」という視点からテルアビブ大学のアヴェルブフ・イリット教授、ロンドン大学のモリス・ヤギ教授、エルサレム・ヘブライ大学のオトマズギン・ニシム教授の3人が講演を行った。

神道が日本古来の思想だけでなく、仏教からも深く影響を受けていることの説明や、日本人の生活の中に深く根差した「祭り」、そこで奏でられる「神楽」や「舞」の意味なども解説された。さらに、時代によって神道と政治との関りが様々であった点も論じられた。

その中には、「森羅万象に神が宿る」という多神教的な考えを、ユダヤ教徒が真に理解することがいかに難しいかというコメントがあり、また会場からの質問の多くが八百万の神という存在に対するものであった。

たとえ「あらゆるものに神が存在する」としても、それは「唯一の神がどこにでも存在する」と理解するユダヤ教徒にとって、神道の考えに共感することは困難であるようだった。それでも、神道を基礎とする日本文化を理解しようとする熱意が感じられるシンポジウムであった。

午前の部の最後には、エルサレム・ヘブライ大学の客員フェローでもある上田教授による特別講演が行われた。上田教授は国史家・平泉澄の研究を専門としており、国史と神道の関係についてわかりやすく解説した。

昼食を挟んで午後の部となったが、昼食には和食の弁当が用意され、ベジタリアン対応もされていたことが印象的であった。

午後の部では、午前の部での神道理解による多神教という考えを得た上で、一神教のユダヤ教をどう見つめていくのかという視点から論じられた。

エルサレム・ヘブライ大学よりブロンドハイム・メナヘム教授、アッシャー・シーガル・エリツール教授、ガッバイ・ウリ教授が順に登壇し、それぞれが政治への影響、普遍主義論、典礼という視点から講義を行った。

多神教である神道との違いを解説するのではなく、神道を通して、一神教の民族宗教としてのユダヤ教を見つめなおそうとする試みだった。

これまで注目されることが少なかった神道とユダヤ教の関係について、これからの可能性を大いに期待させるシンポジウムであった。

なお、本シンポジウムの主催団体であるイスラエル日本学術文化振興協会のクシェレビチ・ハダス理事長を本紙6頁の『話題のこの人』欄に取り上げているので、ぜひ、合わせてお読みいただきたい。

ラグビーと剣道

アレキサンダー・ベネット
（関西大学国際部 教授）

多くのファンにとって、ラグビーは「宗教」である。ニュージーランド人とウェールズ人は、特に熱狂的なことで有名だ。私はニュージーランド出身だが、日本で開催された2019ラグビーワールドカップ（RWC）で、ウェールズ代表チームのチーム・リエゾン・オフィサーに任命されたことは、人生に一度しかない光栄だと思った。

RWCは、海外からの選手団・観客を合わせると世界で3番目に規模が大きいスポーツイベントとして知られる。4年に一回の大会は6週間続き、40億人以上の人がテレビで視聴するなど、世界中に注目される。

私の仕事は、本質的にチームの一員としての「何でも屋さん」である。レストランの検索、通訳、移動の手配や確認、セキュリティ、トレーニングセッションの支援（走ってボール拾って蹴り返すなど）、怪我をした選手を病院もしくは空港に連れて行くことや、選手の家族の面倒をみることまで、チームの日本滞在のあらゆる面を24時間体制で助けることだった。ウェールズが準決勝まで進出したので、51日間、1日も休めない激務となった。ウェールズチームの精神は「謙虚さと勤勉さ」に基づいている。選手たちはヨーロッパのスーパースターであるのに、非常に腰が低く、厳しいトレーニングや骨の折れる試合の後でさえ、いつも私に「手伝うことはないか」と尋ねてくる毎日だった。

彼らはまた、日本文化に非常に興味を持ち、休養日の活動の一つとして、剣道の見学で30名ほどを、別府大学付属名穂高校の道場に連れて行った。名穂高校剣道部は、高校生らしい激しい稽古を見せてくれた。選手たちは、高校剣士の謙虚さと努力に深い感銘を受け、剣道の闘魂、捨て身精神と、常に相手を尊重するという姿勢がラグビーと同じだと感じたそうだ。見学だけではなく数人の選手が剣道体験をした。さすが、プロアスリートは器用で、思った以上に上手にできていた。ただ、面を付けているとはいっても、女性を竹刀で打つということに関して、かなり違和感があったようだ…。やはり、紳士であった。

結局、ウェールズチームは、RWC三位決定戦でニュージーランドと対戦をして負けてしまったが、日本に来て剣道が一生忘れないハイライトだったと、選手たちからメールが届いている。武道精神とラグビー精神は近いものであると、私は確信したのである。

話題のこの人

ユダヤ教と神道の出会い

クシェレビチ・ハダス

特定非営利活動法人 日本・イスラエル学術文化振興協会理事長

大阪大学大学院博士課程で学びながら、特定非営利活動法人日本・イスラエル学術文化振興協会を設立、自ら理事長を務め、両国文化の交流・理解のために活躍するクシェレビチ・ハダス氏に神道との出会いやその興味について話を聞いた。

神道との出会い

最初に日本を訪れたのは2008年の夏、大学の夏休みであった。当時、エルサレム・ヘブライ大学の学部生で、日本文化に関心を持っていた。この旅で最も強い印象を受けた事の一つが、福井県の永平寺に行ったことと、熊野古道を歩いたことだった。訪れた神社仏閣の外観は、エルサレムの礼拝所とは非常に異なる趣だったが、それでいて、不思議と通じるものを感じ取った。このような経験から、両社会における制度としての、あるいは文化としての宗教の役割に関心を寄せるようになった。

両文化の新たな架け橋を築く

2012年、大阪大学の大学院生として日本に戻り、イスラエルと日本という非常に隔たりのある二つの場に、コミュニケーションと相互学習のための新たな架け橋を築く事を決意。1年後、ヘブライ大学の恩師であるニシム・オトマズギン教授の力添えを得て、日本・イスラエル学術文化振興協会（The Association for the Advancement of Israel-Japan Academic and Cultural Relations）という、イスラエル、あるいはユダヤと日本の両文化間の関係構築に捧げられたNPOを立ち上げた。

このNPOの最初の取り組みは、ユダヤ教と日本宗教の学者たちの対話を促進することだった。2016年にはユダヤ教と日本の専門家たちの混成グループが日本を旅し、伊勢神宮や出雲大社、諏訪大社、そして明治神宮を訪問した。

このグループは各地で神社の歴史や、そこで執り行われる儀式について学び、現地の神職や学者たちによって迎えられ、ともに供物を捧げた。訪問グループの大半の人々にとって、これが初めての神社訪問であった。1度目の使節の成功に力づけられて2度目の訪問グループを結成。2018年8月に東北地方から日本各地を訪問した。

ユダヤ教と神道の類似性を体験

最も強烈な経験の一つは4月15日の諏訪大社訪問で、この日には御頭祭が行われていた。ユダヤ教徒の参加者たちは、聖書でアブラハムが自分の息子のイサクを捧げるように命じられた物語との類似性を思わずにはおれなかった。

祭が行われる守屋山（もりや）という名前も聞き覚えがあるものだった。旧約聖書の中にモリヤ山という名が2度言及されているからである。1度目は、神がアブラハムにイサクを祭壇へ連れて来るよう命じた時であり、2度目はソロモン王が大神殿を築く地として登場する。

4月の御頭祭の日にちも、ちょうどユダヤ教の過ぎ越しの祭として聖書に記された時期（「ニサン」の月）にあたり、これは神に生贄を捧げる時なのだ。

さらなる議論と相互理解

この時の議論では、いくつか興味深い論点が生じ、色々な意見が出された。その一つがユダヤ教と神道の両者における神の重要性であった。

神とは、今日、一神教の諸宗教が主張するような一なる存在なのか、それとも神道のカミのような複数の存在なのか。さらには、神は遍在するのか、それとも本質として局所的な存在なのか。

ユダヤ教では、多くの者たちが神を普遍的な存在と考えようとするが、旧約聖書のいくつかの部分では、神は非常に局所的な存在である。同様に、カミは局所的な存在と捉えられているが、カミは時には一つの土地から別の土地へ、国境をも越えて移動する事さえもあり、この事がカミを普遍的な存在とするとも、考えられると議論された。

もう一つは、神の姿に関する問題であった。カミにも、神にも、はっきりとした顔や姿がない。これらについて、多いに論じられた。

これらの議論や、その他の多くの点について、日本・イスラエル学術文化振興協会が2019年9月25日に東京国際文化会館で開催したシンポジウム『ユダヤ教と神道の出会い』（本誌5頁に関連記事）において、両国専門家により検討された。ハダス氏は、今後も、両国文化の架け橋の役割を担うことに意欲を示している。

歴史 絵葉書 シリーズ8

即位の礼・大嘗祭

The Enthronement Ceremony and the Grand Thanksgiving Rite

マイケル・パイ（マールブルク大学名誉教授）

この絵葉書は、京都の紫宸殿で行われた、大正天皇即位の礼の儀式を描いています。これを描いた画家は、余白に記載されているように、奈良女子高等師範学校の水木要太郎先生でした。高御座 —— 即位の宣言を高い位置から行う玉座 —— は、紫宸殿のすぐ内側に見ることができます。即位の礼の儀式的な素晴らしい印象を伝える絵葉書です。すべての参加者は伝統的な装束を身に着けており、立ち並んだお祝いの幟のうち、紫宸殿に最も近い幟には、烏と鵄のイメージが描かれています。これらの鳥は、神武天皇が大和朝廷による統治を確立する際、神の使いとして手助けをしました。

この絵葉書の主題は、大嘗祭で天皇が悠紀殿から主基殿まで移動される儀式の行列です。悠紀殿と主基殿は、この重要な儀式である大嘗祭に使用される、一時的な二つの建物ですが、この絵葉書には描かれていません。建物を除外することにより、儀式の動きに重点を置いているのです。中心人物はもちろん天皇です。しかし、左下隅にいる人物に注目してください。天皇が歩く敷物を伸ばしています。これは、二つの並立する建物である悠紀殿と主基殿の、儀式的なつながりこそが重要であることを強調しており、それらの相補性を象徴しているのです。

この絵葉書には、天皇・皇后の高御座が描かれています。これは、大正天皇のお出ましに対する画家の印象でもあります。天皇・皇后は定位置についているようです。当時、葉書の表面に切手を貼ることは珍しくなく、この絵葉書でも、1½SN（1銭5厘）の切手が貼られています。これは1915年に発行された大嘗祭記念切手のひとつで、即位の礼で使用される烏帽子を描いたものです。

かつて京都にあった宮中三殿を描いた絵葉書です。 これらは、天照大御神の崇拝の賢所（かしこどころ、けんしょ）、歴代天皇の御霊を祀る皇霊殿、および皇室の先祖の霊を祀る神殿です。伝統的に墓参りが行われる春分の日と秋分の日に、宮中三殿で儀式が行われることが知られています。この絵葉書は、大正天皇の即位の礼と大嘗祭の記念として発行されたものです。

書評

イスラム国とニッポン国
―― 国家とは何か

三宅善信［著］

集広舎、2019年10月22日刊、256ページ、ISBN 978-4-904213-83-4、本体1,400円＋税

評／椎名 潤（岐阜女子大学客員教授・神道国際学会監事）

改元とは、いつの世でも「クニの民安かれ」と願って行われるものだが、美しく調和のとれた「令和」という新しい御代は一体、どのような形になるのか、皆目予想できない。

これまでに経験したことのないような自然災害の猛威、確実に起こるであろう巨大地震。さらには低迷したままの経済や不安定さを増した国際秩序など、不確実性は高まるばかりである。特に少子高齢化や新たな格差社会の出現などは、これまでの「古き良き日本社会」を確実に破壊するものである。

こうした新時代の幕開けにあたり、本来の「クニのかたち」とは何かを、真剣にしかも実体験から問いかけたのが本書で、まさに「目からウロコ」であり、惰眠を貪っている各界指導者に対する警世の書である。

著者は「クニのかたち」として、「統治しようとする意志」があることを必要条件とする。しかし、元寇襲来や先の大戦時を除き、2000年にわたって安穏として暮らしてきた日本人は、改めて、これを深く考えることはしてこなかった。それが、今日の憲法論議や拉致問題、外国人労働者の受け入れなどにつながっていることを、私たちは肝に銘じるべきである。

この一例として、著者は国際社会を翻弄させた「イスラム国」を、古代のペルシャ、中世のモンゴル、近代のソビエトをはじめ、古今東西の諸民族の興亡を分析することで、領土、国民、統治機能、国語、国教（宗教）など、国家を成立せしめる要件を私たちに提供してくれている。

元寇襲来時、日蓮が著した『立正安国論』を取り上げ、そこに見られる「國」と「国」と「圓」という３種類の「クニ」について、独自の見解を示している。それによると、日蓮は、それぞれのクニの文字を使用した71回中、56回が「圓」表記で、「国」はわずかに14回。つまり、日蓮は３種類の字を使い分けて、「クニのかたち」を的確に表現していたというのである。「圓は法（仏法）によって繁栄する」と述べているように、明らかに京都の朝廷や鎌倉の幕府による統治機構やモンゴルなどより、人々のおわしますところがまさに「圓」であった。

すなわち、日蓮は当時の民衆を一番大事に考え、「圓」表記を多用したが、筆者はこれを現代風に「Nation=国民」とし、國には「Land＝国土」、国には「State＝統治機構・国体」を当てはめている。

また特に、第５章の「国民国家の統合原理としての宗教の復権」に注目したい。その根底に著者の30年にわたる世界の諸宗教指導者との対話・交流から得た知見が大いに生かされており、シリア内戦では自らが、拉致された聖職者の解放を訴える行動に出るなど、「祈りと実行」の人でもあることを忘れてはならない。

最後に「あとがき」にさりげなく記されているが、筆者の憲法改正論にも注目したい。「日本国憲法が制定された1946年から今に至るまで、この憲法が想定する国際情勢が実現されたことがただの一度もないことは明らか。この憲法を維持する限り、真にこの国が繁栄することなどあり得ない」とし、９条に第３項を付け加えるような、小手先の改憲ではなく、陰陽すべての数字を和した聖徳太子の「17条憲法」や天地人・３つの要素を掛けたという全51カ条の「御成敗式目」など、「過去の日本人の叡智に耳を傾けるべきである」という提言を重く受け止めるべきであろう。

書評

決定版 日本書紀入門
―― 2000年以上続いてきた国家の秘密に迫る

竹田恒泰・久野潤［著］

ビジネス社、2019年７月14日刊、190ページ、ISBN 978-4-828420-96-7、本体1,000円＋税

評／三宅 善信（神道国際学会 理事長）

本書は、テレビでもお馴染みの政治評論家の竹田恒泰氏と、日本の軍事史・艦内神社研究家の久野潤氏による対談形式の作品である。書名に「日本書紀入門」とあるが、編年体によって編まれた全三十巻に及ぶ『日本書紀』の内容に即した、いわゆる「解説本」ではない。むしろ、その副題にあるように、「2000年以上続いてきた国家の秘密に迫る」ことを目的にした書である。

昨年は、平成から令和への御世代わりに伴う一連の即位儀礼が厳修されたことによって、日本国民はもとより世界中の人々に対して、悠久の歴史を誇るこの国の「国柄」について大変解りやすく可視化されたのである。そして、今からちょうど1300年前の養老４年に撰上された『日本書紀』も、天武・持統朝における一連の制度改革の完成、すなわち、律令国家体制の確立を果たし、大唐帝国の最盛期という東アジアの周辺諸国にとっては緊迫した国際情勢のもとに、日本という国家の「国柄」を世界の国々に可視化して示すために、当時の国際共通語であった漢文で編まれたものであると位置づけている。

「明治維新」と言えば、多くの人は「日本が欧米の近代文明を導入した社会改革である」と捉える。しかし、筆者は、その要諦は「王政復古」であり、圧倒的な国力の差をもって押し寄せてきた欧米列強による侵略を国家を挙げて跳ね返し、急速に近代国民国家として模様替えできたのは、徳川光圀による『大日本史』の編纂をはじめ、橘守部による『日本書紀』の再発見や歴代天皇陵を調査・治定して『山稜史』を著した蒲生君平など、徳川幕藩体制の下でも日本の「国柄」について常に心に留めていた人々が居たことが大きいと指摘している。社会混乱によって実現できなかったとは言え、天保11年(1840年)には、徳川斉昭らによって「紀元2500年」を祝う行事まで企画されていたそうである。

大日本帝国憲法の発布は、日本の「国柄」を近代法によって成文化したものであるが、大東亜戦争敗戦の翌年元日に発表された昭和天皇による『新日本建設に関する詔勅』を精読してみると、その内容は、いわゆる「人間宣言」と呼ばれるようなものではなく、冒頭に、あらためて明治天皇による『五箇条の御誓文』をそのまま引用し、神武肇国の精神をあらためて再認識させるものであることは明白である。

昭和15年、紀元2600年を祝して、東洋で初のオリンピックが開催されようとして準備されていたが、第二次世界大戦の混乱によって中止を余儀なくされた。昭和39年に開催された東京オリンピックの際には、まだまだ国力に余裕がなく、単に「戦後、見事に復興した日本の姿を世界に見せる」という趣旨のものであった。しかし、令和２年に開催される東京オリンピックは、時まさしく、『日本書紀』撰上1300年の佳節に当たり、その開会式では、「幻のオリンピック」となった紀元2600年の東京オリンピックでできなかった日本神話を大々的に取り入れた演出で、世界の人々に日本の「国柄」をアピールする好機とすべきという指摘で、この書を閉じている。

理事の業績・研究報告

三宅善信理事長

8月19～25日　ドイツのリンダウで開催された世界宗教者平和会議第10回世界大会に参加。

清水寺で開催された「核なき世界」講座で専門家と意見を交わす三宅善信理事長

9月29日　清水寺で開催された日本パグウォッシュ会議・明治学院大学国際平和研究所・WCRP日本委員会共催の「核なき世界」講座でパネリストを務める。

東方正教会のバルトロマイ全地総主教と言葉を交わす三宅善信理事長

10月4日　金光教泉尾教会で開催された国際宗教同志会例会を事務局長として運営。大阪国際大学の三木英教授を招き『国内におけるニューカマー宗教の伸張とその影響』について討議する。

10月22日　『イスラム国とニッポン国・国家とは何か』(集広舎)を刊行。

11月15日　四天王寺で開催された近畿宗教連盟と大阪府宗教連盟の合同総会に常任理事として出席。

11月21～22日　対馬各地に鎮座する神社を現地フィールドワーク。

11月25日　神道国際学会会員らを率いて大嘗宮跡でフィールドワーク。

11月25日　東京ドームで開催されたフランシスコ教皇の「平和ミサ」に列席。

11月28日　むつみ会神幸殿で開催された第214回IARF日本連絡協議会に出席。

12月10日　シェラトン都ホテル大阪で開催された第514回国連晩餐会で、関西国連協会副本部長として挨拶を行う。

12月13日　法隆寺で厳修された聖徳宗管長大野玄妙大和尚の本葬儀に参列。

12月26～27日　同志社大学で開催されたコルモス研究会議に常任理事として出席。

芳村正徳常任理事

11月24日　11月23日(土)から26日(火)にかけて、第266代ローマ教皇フランシスコが訪日。24日夕刻より広島市の平和記念公園で開催された「平和のための集い」に招待され参列。さまざまな宗教者とともに世界の平和のために祈りを捧げた。

教皇庁の新年ご挨拶

教皇庁諸宗教対話評議会から、毎年、本会を含む神道界の団体等へ、新年の挨拶文が贈られる。2020年の年頭にあたり、「すべてのいのちをともに守る神道とキリスト教の信者」と題する書状を、今年も受け取った。

全文(英語・日本語)は、本会ホームページ上で公開中。

PONTIFICAL COUNCIL
FOR INTERRELIGIOUS DIALOGUE

Christian and Shinto Followers Together:
Protecting All Life

MESSAGE TO FOLLOWERS OF SHINTO
2020

Vatican City

新刊紹介

『神道文化の現代的役割――地域再生・メディア・災害復興』
黒崎 浩行、弘文堂、2019年12月、4180円

『二十二社――朝廷が定めた格式ある神社22』
島田裕巳、幻冬舎、2019年11月、968円

『えびすさま　よもやま史話――「西宮神社御社用日記」を読む』
西宮神社文化研究所【編】、神戸新聞総合出版センター、2019年11月、1980円

『出雲大社の宝物と門前町の伝統――特集「吉兆神事と神謡・船謡」』
いづも財団出雲大社御遷宮奉賛会【編】、今井出版、2019年8月、1018円

『江戸時代の神社　日本史リブレット』
高埜利彦、山川出版社、2019年6月、880円

『縄文の神が息づく一宮の秘密』
戸矢学、方丈社、2019年9月、2035円

『千家尊福と出雲信仰』
岡本雅享、筑摩書房、2019年11月、1034円

『日本の神様100選』
日本の神社研究会、宝島社、2019年11月、1320円

※価格はすべて税込みです。

大野玄妙先生を偲んで

神道国際学会理事長　三宅善信

10月25日、個人的にも大変お世話になった法隆寺管長の大野玄妙猊下(享年71)が遷化された。長年、世界宗教者平和会議日本委員会の理事としてご一緒させていただいた他にも、4年前には、本会会長のマイケル・パイ先生と三人で鼎談させていただき、その成果を『聖徳太子思想の中心にあった神道(Tracing Shinto in Prince Shotoku's Thought)』として日本語・英語併記で2017年に刊行させていただいた。仏教の教理史については言うまでもないが、五胡十六国期から南北朝期に至る中国史についての大野先生の博識には驚かされた。2021年の聖徳太子千四百年御聖諱を共にお迎えしたかった。

編集後記

令和の時代最初の新年、おめでとうございます。おかげさまで、今号をもちまして、神道フォーラムも60号、人間で言うなら、還暦を迎えることができました。ご愛読に感謝申し上げます。昨年は年間を通して、「御代替り」をテーマとした活動やコラムを、紙面でお伝えしてまいりました。さて、今年は、日本書紀が編纂されてから1300年の記念の年であり、またオリンピックイヤーでもあります。どちらも、神道を通して考えると非常に面白い見え方があり、本会として、ぜひ追究したいテーマです。皆様に興味を持っていただける記事を、ご提供していきたいと存じます。

神道国際学会からのお知らせ

◆ ご入会のご案内：神道国際学会にはどなたでも入会できます。資料をご請求ください。

- 一般会員(年会費) …… 5,000円
- 賛助会員(年会費) …… 30,000円
- 特別賛助会員(年会費) …… 50,000円
- 法人会員(年会費) …… 100,000円

特定非営利活動法人
神道国際学会
〒154-0014 東京都世田谷区新町 3-21-3 桜神宮 神習会館内
Tel. 080-7662-0640 / info@shinto.org